古代文字資料館発行『KOTONOHA』138 号(2014 年 5 月)

十九世紀の広東語(7)文末助詞“呢”の発音

竹越美奈子

一

現代粤語には漢字“呢”で表記される語が二つある。近称の指示詞“呢”[˂ni]と文末助詞“呢”[˂nɛ]である。同じ漢字で表記されるが、発音は違う。

(1) 指示詞の例：呢個人（这个人）

(2) 助詞の例：我係王麗，你呢？（我是王丽，你呢？）

両者は十九世紀の前半の資料ではともに˂ni と書かれていることから、かつては同じ発音であったとわかる。これに関連することであるが、十九世紀から現代に至るまでの間に、粤語の母音は[i]>[ei]という体系的な母音推移による変化を経ている。[1]たとえば現代粤語では“你”は[˃nei]であるが、十九世紀前半の資料では˃ni と表記されている。“你”nei は、体系的な母音推移の結果[ni]>[nei]となったのである。これに対して指示詞の“呢”˂ni は母音推移の影響を受けなかった。では“呢”（助詞）は十九世紀前半の˂ni からどのような歴史をたどって現在の形˂nɛ になったのであろうか。小文は、“呢”（助詞）[ni]>[nɛ]は体系的な母音推移が完了した後に、それとは無関係に個別に起きた弱化現象であると考える。以下、早期粤語資料の記述から“呢”（助詞）[ni]>[nɛ]の変化が起こった要因と時期について考察したいと思う。

二

早期粤語資料における表記の変遷は以下の通りである。

表 1：指示詞と助詞の表記の変遷[2]

		Morrison 1828	Bridgman 1839	Williams 1842	Bonney 1854	Devan 1858	Chalmers 1859
(参考) “你”	表記	ne	˃ní	˃ní	nee	˃ni	˃ni
	音価	[ni]					
“呢” 指示詞	表記	ne	˂ní	˂ní	nee	˃ni	˂ni
	音価	[ni]					
“呢” 助詞	表記	ne	˂ní	˂ní	nee	˂ni	N.D.
	音価	[ni]					

[1]この現象についてはすでに李新魁(1994)、高田(2000)などで指摘されている。特に高田(2000)では、この変化を早期粤語資料の記述から裏付けている。

[2]Morrison(1828)と Bonney(1854)は声調なし。Devan(1858)で指示詞の声調が陽上となっているのは誤植か。

Lobscheid 1867	Chalmers 1878	Ball 1883	Ball 1888	Fulton 1888?	Chalmers 1891
⊆ní	⊆ni	⊆néi	⊆néi	⊆ni	⊆ni
[ni]		[nei]		[ni]	
⊂ní	⊂ni	⊂ni,○ni	⊂ni,○ni	⊂ni	⊂ni
[ni]					
⊂ní	N.D.	⊂ne,⊂ni,○ne,○ni	⊂ne,⊂ni,○ne,○ni	⊂ni	N.D.
[ni]		[nɛ]/[ni]		[ni]	

Ball 1907	Baronsfeather 1912	Jones & Woo 1912	Cowels 1915	Chao 1947	現代標準粤語	
⊆néi	N.D.	⊆nei,⊆ne[3]	⊆nei	nee		你
[nei]		[nei]			[nei]	
⊂ni,○ni	⊂ni	⊂ni	⊂ni	○nhi		呢 (指示詞)
[ni]					[ni]	
⊂ne,⊂ni,○ne,○ni	⊂ni	○nɛ:	⊂ni	○nhe		呢 (助詞)
[nɛ]/[ni]	[ni]	[nɛ]	[nɪ]	[nɛ]	[nɛ]	

体系的な母音推移（[i]>[ei]）を最初に資料に反映させたのはボールである。それ以前の資料では一律に“你”[ni]、“未”[mi]、“幾”[ki]であったものが、Ball(1883)では“你”[nei]、“未”[mei]、“幾”[kei]となっている。しかしながら、早期粤語資料の編者がこの変化にまったく気づいていなかったわけではなく、すでにBridgman(1839:vii), Williams(1856:xvi)に、例外的ではあるが、[i]の韻が[ei]のように発音されることがあるといった観察がある。ボールの時代にはこれはもう例外と言えないくらい一般的になっており、これらを[i]と記したウィリアムスの資料をボールは間違いであると批判している(Ball1888:xv)。Parker(1880:364)においては、「ウィリアムスが[i]と記述したものは、mi,ni のような口語語彙にのみ存在するものである」というように、[i]と発音する方が例外的なのだと認識されるまでに至っている。（以上は高田 2000 参照）

しかしながら、ボールの時代になっても助詞“呢”の発音変化[ni]>[nɛ]はまだ顕在化していなかった。ボールの著作においても、指示詞“呢”と助詞“呢”の課文中での表記はともに[⊂ni]である。（筆者が確認したのは Ball1883,1888,1907）しかしながら、文法解説編の文末助詞の項における“呢”の発音の説明では、「ne、またはより一般に ni」[4](Ball1883:80, 1888:114, 1907:124)となっており、ni と読む方が多いものの、ne と発音されることもあることにボールは気づいていた。

[3] 単独の e は時として、重要でない語がとても短く発音されるとき、ei の替わりになる。(Jones1912:xiii)(e alone is occasionally substituted for ei in unimportant words when pronounced very short.)

[4]原文は「⊂Ne, or more commonly ⊂ni,」。Ball(1883)の記述には、「more commonly」の但し書きがない。

その後二十世紀になって、この変化は無視できなくなった。以下の記述は“呢”についての Cowels(1912)の解説である。

１．指示詞“this”としては、ni は chi における i の音（筆者注：“知[i]”と同韻）で発音される。
２．疑問の助詞としては chik における i の音（筆者注：“直”の主母音である[ɪ]）で発音される。この用法はちょうど我々が英語の文の最後にあるクエスチョンマークを単なる疑問イントネーションにするのではなくて、声に出して言って言葉にしたようなものである。
３．口語では ni を疑問の助詞として気軽に使うことがよくある。単体として表現するには長すぎる文を区切るとき、この助詞が自由に使える。その効果は英語で長い文のフレーズの間におくカンマのようなところがある。[5]

つまりこの時代、指示詞の“呢”は依然として[ni]であったが、助詞の“呢”は主母音が弱化して[ɪ]になり、指示詞と異なる発音を獲得していた。しかしこのときはまだ「chik における i の音」という表現からもわかるように、Cowels の認識では独立した韻にはなっていない。あくまで[i]の弱化の結果である。この点において、すでに“遮、咩、嘅[ɛ]”などで使われている e と同じ表記にしているボールより保守的とも言える。ただ Cowels は、助詞のときは（指示詞と違って）[ɪ]だと言っているのに対して、ボールの方はあくまで（指示詞と同じ母音である）[i]が一般的だとして課文中の注音を[i]に統一しているという点で、ボールのときには発音のゆれと認識されていたことを物語っている。

助詞の注音を[ɛ]に統一して“遮、咩、嘅[ɛ]”などと同じ韻に合流させたのは Jones and Woo(1912)である。発行は Cowels(1915)より先であるが、これはジョーンズが音声学者であり、中国の伝統的な音韻学などより実際の発音を重視した結果であろう。Jones and Woo(1912)では助詞の“呢”は[nɛ:]で、“遮”[tsɛ:]“咩[mɛ:]”などと同韻である。趙元任も同様で、二十世紀中葉には助詞“呢”と指示詞“呢”の発音は完全に分かれたと言えよう。

三

表２：指示詞“呢”と助詞“呢”の発音

	19c 前半	19c 後半	20c 前半	20c 後半～現在
指示詞	ni	→	→	→
助詞	ni	ni/nɪ	nɛ	→
cf.代名詞“你”	ni/nei	nei	→	→

[5]21. As a demonstrative this, *ni* is pronounced with the sound of I in chi. 22. As an interrogative final ni is pronounced with the i sounded as in chik. In this use it is exactly as if we vocalized the ? mark at the end of an English sentence and made a word of it instead of simply giving a questioning inflection. 23. A loose use of *ni* as an interrogative particle is to be noted in colloquial speech. Breaking up a sentence too long for expressing as an entity, this particle is freely used. Its effect is somewhat that of the comma in English between the phrases of a long sentence. (Cowels1915:47)

19 世紀前半に、粵語の母音は体系的な母音推移（[i]>[ei]）を経験したが、口語的語彙である指示詞“呢”と助詞“呢”はその影響を受けなかった。その後 19 世紀後半から 20 世紀にかけて、助詞の“呢”の発音に[ni/nɪ]というゆれが生じた。ほどなく新しい発音である[nɪ]が勝利し、すでにあった[ɛ]の韻に合流することで完全に指示詞“呢”と違う発音を獲得し、違う語彙と認識されることになった。その原因は明らかではないが、常用の語彙に同じ発音のものがあるのは意味弁別上混乱のもとになること、口語的な語彙の場合発音が変化しやすい事などが考えられるのではないか。違う発音を獲得したことにより、今後は違う漢字を獲得する可能性もあるが、助詞の方は機能もほぼ等しい官話の助詞“呢”と同じ漢字なのでこの漢字を使い続ける可能性が高い。

早期粵語資料（年代順）

Morrison(1828) *Vocabulary of the Canton Dialect.* Macao: G. J. Steyn & Brother.

Bridgman(1839) *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect.* China.

Williams(1842) *Easy Lessons in Chinese.* Macao : Office of the Chinese Repository.

Bonney(1854) *A Vocabulary with Colloquial Phrases, of the Canton Dialect.* Canton: Office of the Chinese Repository.

Devan(1858) *The Beginner's First Book, or Vocabulary of the Canton Dialect.* Hong Kong: China Mail Office.

Chalmers(1859) *An English and Cantonese Pocket-Dictionary.* Hong Kong: The London Missionary Society's Press.

Lobscheid(1867)*Select Phrases in the Canton Dialect,2nd ed.* Hong Kong: DeSouza & Co.

Chalmers(1878)*English and Cantonese Dictionary 5th ed.* Hong Kong: De Souza & Co.

Ball(1883) *Cantonese Made Easy*, Hong Kong: China Mail office

Ball(1888) *Cantonese Made Easy 2nd ed.*, Hong Kong: China Mail office

Fulton(1888?)*Progressive and Idiomatic Sentences in Cantonese Colloquial 3rd ed.* Hong Kong: Kelly & Walsh.

Chalmers(1891)*English and Cantonese Dictionary 6th ed.*, Hong Kong: Kelly and Walsh ltd.

Ball(1907) *Cantonese Made Easy 3rd ed.*, Hong Kong: Kelly & Walsh Ltd.

Baronsfeather(1912) *The A. B. C. of Cantonese.* Pakhoi: C.M.S. Hospital.

Jones and Woo(1912) *A Cantonese Phonetic Reader.* London: University of London Press.

Cowles(1915) *Inductive Course in Cantonese.* Hong Kong: Kelly & Walsh Ltd.

Chao(1947) *Cantonese Primer.* MA: Harvard University Press.

引用文献

高田時雄(2000) 「近代粵語の母音推移と表記」『東方學報・京都』72:754-740.

李新魁(1994) 『広東的方言』広東人民出版社。